

游美

- 1 内山節子さんの作品と作品についての言葉
- 2 作家探訪 荒木久夫先生
- 3 美に遊ぶ
- 4 美術鑑賞旅行
- 5 ギャラリートーク
デッサン学習会
- 6 中川純一氏講演会
緊急連絡／訂正／あとがき



内山節子「希望」

2019年／油彩・カンヴァス／F30号

友の会誌「游美」の表紙に、私の作品を掲載するようにとの連絡を頂きました。大変嬉しく光栄な事でございます。

高齢化社会を迎え、私もこの「游美」が皆様のお手元に届く頃は83歳の誕生日がまいります。毎日の生活は健康で他人様に迷惑を懸けないよう、自立する生活を送れるよう、努力しています。

絵画の制作を友として40数年、描く事がただただ楽しくて、スケッチブックをかかえての生活でした。そして洋服デザイナーとしての仕事と音楽を奏でる喜びで、「あっ」と言う間の一日が過ぎて行きます。

拙い作品を友の会の皆様にお目にかけて恐縮ですが、反面喜びでいっぱいです。私の人生の最大のエポックとなる事でしょう。

この作品の花束は私の記念日に子供たちが贈ってくれました。元気な花束をみて、急に「希望」という文字が浮かびました。『絵画は気持です』の想いでいっきに描き上げました。この作品で大きな希望を皆様と共有したいと思っています。高齢になっても希望を失わずにがんばりましょう。

(ひたちなか市在住)

探訪



水彩画家
荒木久夫先生を訪ねて

原風景に 心象風景を描き込む

水戸から国道123号線を北上。台風19号で水没した常磐道水戸北スマートIC一帯の爪痕が残る景色を左右に見ながら更に北へ。水害はなかった城里町の台地にある先生のアトリエを11月15日に訪問した。

油彩から水彩へ

先生は初期には油彩画を描いていた。しかし、世の中は抽象画全盛時代でそれに抗い10年程筆を置いた。その後、水彩画は、(1)乾きが早く、自分の描くスピード、体質にぴったり合っている、(2)ややもすればしつこきが出る油彩画では出しづらい透明感、爽やかさを出しやすいことから、水彩画に筆を変えた。

以来、集落のある風景を求めて県内外を写生し、そこに住む人々の生活感と空気感のある絵を描き続けた。

佐原の風景に出会う

利根川を超えた佐原で、生涯の風景と出会う。「人の生活が漂う古い家並み、小野川の水面、風にたなびく柳の風景は、生涯描き続けることができる」と確信した。

以来、佐原の風景を原風景として描き続ける。「原風景に自分の心

象風景を描き込む」という一貫した思想で作品の制作を持続。

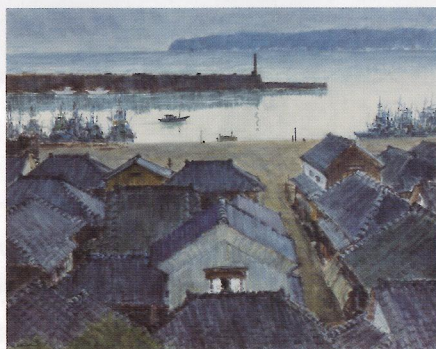
制作に飛躍の時があった。自分の考えている絵のイメージ、色調が同じである、佐原出身の水彩画家柴田祐作先生と白日会展の会場でお会いし、直接柴田先生から指導を頂く機会を得たことであった。その後の荒木先生は、略歴にあるように、1967年茨城県展に入選、72年に白日会入選、78年白日会会員、96年に日展入選、09年に日展会友と華々しい活躍をされてこられた。しかし残念ながら、健康を理由に白日会会員、日展会友を辞退されたとのことである。

先生は友の会ともご縁があり、友の会発足当初代議員を務められたと伺った。

新しい技法

先生の水彩画の目標は「西洋と東洋の融合」とおっしゃる。西洋画の「面」としてのとらえ方と東洋の「線」の表現法を、水彩画で融合させることである。

「水彩画は修正ができないのでは？」とお聞きすると、「水彩を知らない人は皆そう言う」と。「画面全面又は部分的に水洗いが可能で、色に深みを持たせるときは意識的に水洗いの技法を使うことがある」と



「港の集落」
2015年／水彩・ワトソン紙／F100号
改組第2回日展



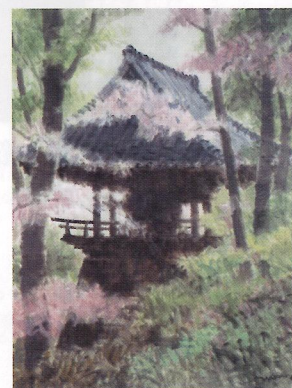
「涼風」
2014年／水彩・ワトソン紙／F100号
白日会創立90周年記念展

お聞きし、インタビュアー全員ビックリ。また、スポンジ等を使って「面」を描くことがあるとのこと。

先生の絵を仔細に鑑賞すると、確かに「面」と「線」が画面に絶妙に広がっている。鑑賞者は作者の「ことば」を通して初めて作者の意図を知り得ることがある。

制作のピークは？

作家探訪をするたびにお聞きしたいことがある。作品を最高に描ける年代はいつごろかということである。まだご活躍中の先生にお聞きすることは失礼を承知の上で勇気を出して尋ねた。「人それぞれでしょう。私は70代になって描きたい絵を描けるようになった」。平均年齢70余の友の会会員の多くが、これから良い絵が描ける可能性を伺い意を強くした。



「鐘楼」
2009年／水彩・マーメイド紙
F80号
第85回記念白日会展

荒木 久夫(あらい ひさお)

荒木先生略歴

1935 茨城県結城郡八千代町出身
1967 茨城県美術展覧会入選(受賞2回)
1972 白日会展入選
1975 白日会展白日賞
1977 白日会展文部大臣奨励賞
1978 白日会会員に推挙
1996 第28回日展入選(以後18回入選)

W. ARAKI

2009 日展会友に推挙
2010 第6回現代茨城作家美術展出品(第7.8.9回展出品)
2013 芸文センターにて「暮らしのある風景 荒木久夫展」を開催
2016 東海ステーションギャラリーにて企画展
2017 茨城の美術セレクション展に出品
現在 茨城県美術展覧会参与、元白日会会員、元日展会友
住所 茨城県東茨城郡城里町那珂西2709-21

有島生馬先生の内弟子

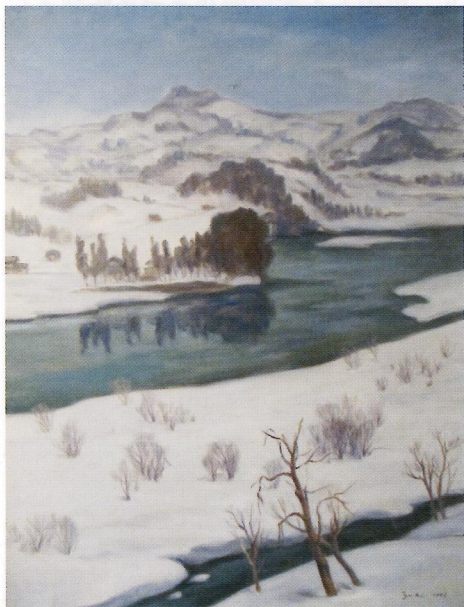
みながわ ゆき
源川 雪

池内 仁美

源川雪（1909～1985）という女性。一水会委員、私の夫の父親のいここにあたります。女子美を病気で中退し、有島生馬先生に師事しました。

有島生馬（1882～1974）は、洋画家で、1905（明治38）年から4年半イタリア、フランスに留学し、帰国後セザンヌを初めて日本に紹介した人物です。初の在野団体である二科会と、一水会を立ち上げました。

茨城県近代美術館で去年開催された竹久夢二展。竹久夢二と有島生馬の友情は、大変に深かったといえます。社会的にも経済的にも恵まれていた生馬は、夢二が未だ画壇では認められず落ち込んでいた時も、孤独と寂寥の詩人と讃え、人気落ちた時も夢二を励まし続けます。夢二が榛名に芸術家村を造ろうとした時にも、生馬は彼を支えたといえます。夢二は死を目前に生馬に会いたいと願い、墓碑は生馬の筆に依ります。夢二を評価したことで、生馬は文豪から手酷く批判され、絶交されたという話もあります。



「春近く」
1983年寄贈／油彩・カンヴァス／80号
三条市善性寺蔵

20年程前のある日、夫が「佐久に行こう、源川雪の絵があるから」と言い出しました。佐久市立近代美術館を訪ねると、市内で「洋画の3人展」を開催中で、彼女の絵はそちらにあるとの事。神様のお計らいかと奇遇を喜び、ひとけの無い会場で彼女の21点の作品と対面しました。忘れられないのは、男物の服を着た戦後の「少女」の絵。少女の命を描く画家の温かい眼差しを感じました。源川雪は、自身を消し去り、対象の神秘を描いた人だと云います。

昭和20年に有島生馬は佐久に疎開し、戦後も暫く佐久に留まりました。佐久を起点にした写生旅行で定宿にしていた戸倉上山田温泉のホテル清風館の女将 飯島嘉津子氏が、自身の文章の中で源川雪について触れています。

以下 飯島嘉津子「思い出への賛歌」—更埴新聞社へ寄稿—からの抜粋

『もう一人私が此処に書き遺した人がある。それは有島先生に女の一生を捧げ尽くした健康な立派な婦人の事である。彼女と知り合ったのは、我が宿へ何時も先生が連れて来られるように成ったからだ。（略）彼女は新潟県の出身で、（略）名家の令嬢だった。幼い頃から絵を描くのが好きで、（略）両親にせがんで東京上野の美術学校に入学し

たのだ。驚いた両親は東京に一軒貸家を探して、ばあやとお手伝いを付けて、やっと進学を許したのだそうだ。

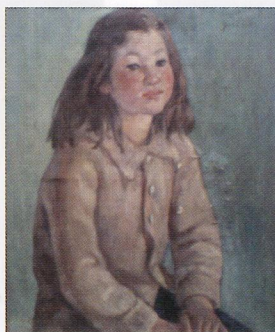
凛として気品のある態度、言葉の端ばしに感じられる利発さ。それでいて、愛らしさがある素敵な女性だった。（略）

先生の愛人と言われ、世間から冷たい目で見られて居たが、彼女は全然意に介せずシャンと背筋を延ばし、一水会会員として展覧会にも出品し、個展なども開き堂々として居られた。

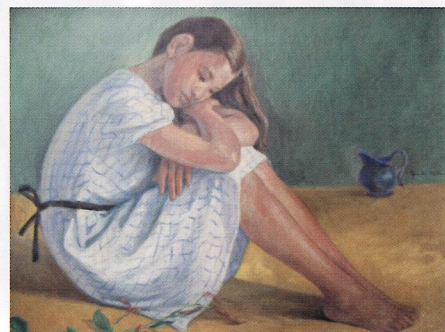
先生の没後、独り静かに絵画に精進され、その四、五年の後、あまり病む事も無く静かに昇天されたとか。私は其の報を受けたとき何と無くホッとして、之で彼女もその人生から開放され、落ち着かれたのだと思い、黙祷を捧げたのである。実に健気で立派な独りの女性の物語なのだ』

源川雪は、故郷三条市の善性寺に眠っています。良寛さんゆかりに縁があるお寺です。雪さんは晩年、ご住職に80号の絵「春近く」を贈りました。小千谷の風景です。

（利根町在住）



「少女」
1949年／油彩・カンヴァス／10号
佐久市立近代美術館蔵



「野草」
1953年母校の小学校に寄贈／油彩・カンヴァス
30号／三条山鳩会蔵

2019年11月19日～21日の3日間、参加者38名は琵琶湖周辺を訪れました。

彦根城、金剛輪寺、MIHO MUSEUM、大津市歴史博物館、三橋節子美術館、佐川美術館、そして石山寺を巡る旅でした。

滋賀の美術館と国宝彦根城をめぐる旅

澤田 憲子



滋賀の美術館を巡ってみたいと思っていた矢先、今回の旅のご案内を頂き、喜び急いで申込み、参加させて頂きました。

11月中旬の近江の国は、どこも紅葉が美しく、燃えるような真紅の紅葉を愛でながら、彦根城・湖東三山の金剛輪寺の階段を上り下りしての散策から旅は始まりました。夕暮れの中のラ・コリーナ近江八幡は、自然と同化するかの様な藤森照信氏の建築に心を打たれ、程良い疲れと共に初日が過ぎました。

翌日、ルーヴル美術館ガラスのピラミッド等で有名なI・M・ペイ氏設計によるMIHO MUSEUMへ。整備されたアプローチ、幻想的なトンネル、美しいつり橋を渡ると、山奥に静かに佇む館が現れ、世界の古代美術の所蔵品の中でも、ひときわ目を引く仏立像が迎え入れてくれました。特別展「備前」ではシンプルなお惹かれる造形美を鑑賞しました。

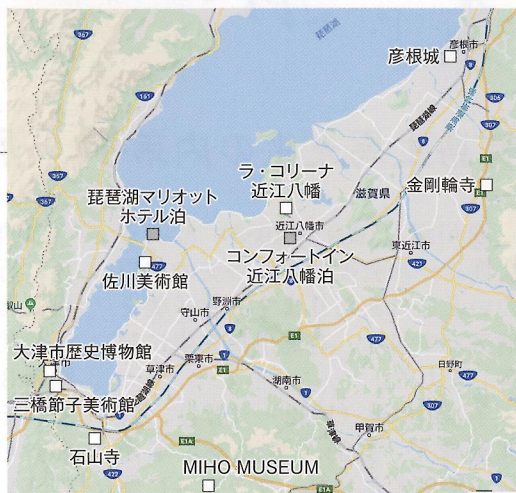
水面の輝く琵琶湖に目を細めながら、湖畔の博物館では、頓知の利いた庶民絵画『大津絵』の解説を受けました。大津絵の醍醐味である笑いを誘う内容を軽やかな関西言葉で語られ、「滋賀」を実感する瞬間でもありました。



「大津絵 鬼の念仏」
18世紀／紙本着色
58.2×22.3cm
大津市歴史博物館蔵

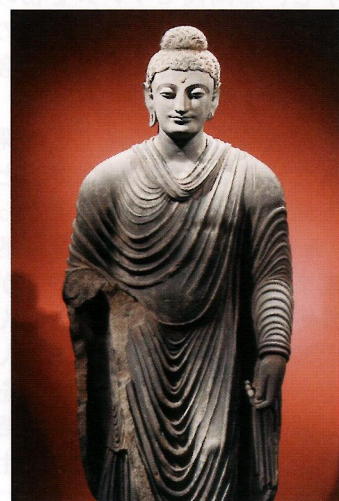


佐藤忠良「帽子・あぐら」
1973年／ブロンズ
H86W65.5D46cm
佐川美術館蔵



ほど近い三橋節子美術館へ移動し、病気によるハンデを感じさせない幼子への深い愛情の眼差し、特に近江の昔話を基とした作品には心が震える思いがしました。

最終日、佐川美術館にて楽吉衛門×深見陶治コラボ展で、暗い室内で緊張感のある抽象芸術を鑑賞し、数ある所蔵の佐



「仏立像」
パキスタン ガンダーラ／2世紀後半
片岩／250cm／MIHO MUSEUM蔵

藤忠良の彫塑では、静寂ながら躍動感あふれる肉体のフォルムを十二分に堪能しました。帰路途中の石山寺ではメトロポリタン美術館「源氏物語」凱旋展が行われており、平安から江戸時代までの物語を伝播する宝物に、古の美の奥深さを知らされました。思い出深い旅を振り返りながら、常に心配りをして下さった役員の方々に心より深く感謝申し上げます。

(水戸市在住)



MIHO MUSEUMで

会員のためのギャラリートーク 憧れの欧米への旅—竹久夢二展

2019年9月23日

竹久夢二のロマンの彼方の世界

中村 秀夫

夢二は、東京の夢二美術館の前を通る機会が多く気になっていましたが、実は何も知らず、中右瑛氏の講演会も機会を逸しましたので、ギャラリートークにて勉強を目指しました。展示では、「憧れの欧米への旅」に向けた生涯にわたる画業がジャンルに分類され、夢二式の全容が整然と分かりやすく説明されました。ただ、あまりにも多岐にわたる夢二の画業は、成り立ちから変遷に付随する意図や背景の理解が難しく、後日、展示と解説書を何度も彷徨しました。

貧しく、一攫千金の「成功」や新しい可能性を皆が目指した時代。意志を貫いて苦学する過程で師の言葉に出会い、ジャンルに縛られないよう、意図して多様な技術を必死に独学し、新たな展開を図りながら創作に集中する真摯な姿の一方で、一世を風靡し、離婚後の岸他万喜に持たせた「港や」は大繁盛するも、借金取りが押しかける「不良」的振る舞いがありました。それこそが、美の描写に磨きをかける原動力となり、疲れた印象の写真を残す原因にもなったのでしょう。

努力の天才であり、語りつくせぬ才能の発露が随所に現れるため、欧米遠征に至る茂次郎（夢二の本名）の心と業をじっくり語り合う夜学がギャラリートークに付随すればなお良かったのだが、と今もなお想い続けているのです。



(水戸市在住)

講師の吉田衣里主任学芸員(前列中央)と参加会員(筆者は後列左から3人目)

デッサン学習会 2019年11月15、16、29、30日、12月6、7、14日

デッサン学習会に参加して

笹崎 せき子

今回のデッサン学習会は、計7日の予定が組まれていました。講師がご指導して下さる日は3回でした。この日を楽しみに待ち、残りの日は、黙々と描きました。

皆様と一緒に描くという事は、とても喜びです。しーんとしてただ一筋に木炭を動かす事は、何か学生の時を思い出すようで若返った気持ちでした。

この私ですが、夏にデッサン会に参加して(友達に強引に勧められ)全然描けませんでした。これではだめだと考えていましたところ、美術館で清水先生がご指導している写真を見て、友の会に入会しました。



清水優先生(右から2人目)による講評風景

そういう訳で、今回2度目の石膏デッサン会です。しみじみ石膏を眺めた事もない私ですが、今真っ白い石膏の魅力に出会い、夢中になっています。何から何までわからない事だらけですが、とにかく描くということ、学ぶということが好きになってしまいました。今出来上がった5枚のデッサン用紙を眺め、試行錯誤している所です。これからもこのような催しをして頂き、皆様と共に、私なりに細々と励んでいきたいと思います。

(ひたちなか市在住)

「古来 人は食とどのように関わってきたか」



今年度新たに友の会の副会長に就任した中川純一氏の講演会が、美術館の会議室で行われた。テーマは「古来 人は食とどのように関わってきたか」。中川学園理事長、中川学園調理技術専門学校校長である中川氏の講演は「食」を軸に原始時代から現代、洋の東西を巡り、生物学や歴史、文化人類学にまで話題が広がった。氏の博識と深い考察力や旺盛なる好奇心が、硬軟入り交じる話題から感じとれた。頷き、驚き、膝を打ち、そして笑い、58名の参加者は一時間半余りの有意義な時間を大いに楽しんだ。

講演の後、講座室に場所を移し珈琲タイム。美術館からも副館長はじめ学芸員の方々が講演会にも参加、会員と共に懇談された。鈴木会長から差し入れのサザコーヒを頂きながら、中川氏に質問したり会員同士の語らいや交流が続いた。参加者から好評の声も多く聞かれ、今後もこのような知的好奇心に応えられる企画を期待したい。



講演会風景



講座室での珈琲タイム

【緊急連絡】「ポルトガルの美と世界遺産巡りの旅 (3/23 ~ 30)」延期

新型コロナウイルスの影響により参加者の安全を第一に考慮し、やむなく延期を決定しました。新日程は未定です。

訂正

游美92号6ページ手塚治虫展ギャラリートーク記事文中で、「みずゑのかがやき10選」(日本経済新聞に連載)は、仮名遣いが間違っておりました。正しくは「みづゑのかがやき10選」です。全く編集担当のミスで、筆者の木村様、山口美術課長にはご迷惑をおかけいたしました。お詫びして訂正いたします。

あとがき

- 食のプロフェッショナルである中川氏の講演は、ヒトが他の指と向き合う親指を持ち、そして火を手に入れた古から始まり、縦横無尽に世界の歴史・文明に分け入り、その洞察を披露してくださいました。食という切り口は興味深く、その後の茶話会でも皆さんの話が弾みました。
- 講演の最後に、和食について述べられた事が印象に残りました。和食がユネスコの無形文化遺産である重要な要素に、行事と密接に結びついた食という観点があると。そして近年お米の消費が減っている、主食を失った民族は減びるとも。我が身を振り返り、行事とご飯を大事にしようと思った瞬間でした。
- 「仏立像」パキスタン ガンダーラ の画像掲載許可および画像データを MIHO MUSEUM 一村武司様からいただきました。厚くお礼申し上げます。
- 「大津絵 鬼の念仏」の掲載許可および画像データを大津市歴史博物館 横谷様からいただきました。厚くお礼申し上げます。
- 佐藤忠良「帽子・あぐら」の画像は佐川美術館 松山様に許可をいただき掲載することができました。感謝申し上げます。
- 源川 雪「少女」の掲載了承を、佐久市立近代美術館よりいただきました。感謝申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報

游美 No.93

発行 2020(令和2)年2月
編集・発行 茨城県近代美術館友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保666-1
TEL.029-243-5111
E-mail: f.momaibk@gmail.com
HP : <https://www.fmoma.com/>

印刷 株式会社 光和印刷